

元気なご飯、普通のご飯

パソコンの前で、仕事を続けながら昼食をとる。サンドイッチにコーヒー、あるいはおむすびにペットボトルのお茶。

スクリーンを見続けながら、口を動かす。

自分でも、なんだか悲しい食事だと思う。

しかし、はつきりいって、時間がない。

職場のだれもが、そんな食べ方をしている。

私の横にいる修くんなどは、食べてすらいない。

若いから、体ももつんだらうか。

そんなことを課長に言ったら、

「おまえだって若いじゃないか」

と、叱られた。

三十は若いのだらうか、わからない。

帰りの地下鉄、吊革につかまっている。

本を読む気にはならない。

以前は、携帯のゲームに熱中したが、今はそれもない。

きちんとしたごはんをたべていないからかな。

あの店を思い出す。

今から数えて、三つ前の職場のちかくにあった。早番の時は、その店に行くことに決めていた。十一時の開店と同時に店にはいる。

「すみません」

と、一度言ったら、

「なんだかパチンコ店みたいでいいですね」と、笑って返してくれた。

仕込みの包丁の音、水の音、煮物のいい匂い。

そんな中で、お茶を飲み、本を読む。

携帯ゲームで遊ぶ。

メールをする。ぼんやりする。

昨日、わたし、何したんだっけ。

あかり、つけたまま寝たんだ。

遅い朝ご飯、早い昼ご飯。

ともあれ、ごはんというものをあの店で食べていた。

おいしいお茶といっしょに。

一日に一回だけでも、きちんとしたごはんを食べていたから、なんだか元気だった。

「当たり前前の、ふつうのごはんですよ」と、店主はわらう。

たしかにそうだ。

夏になれば、なすときゅうり。

夏野菜が、料理はちがうが毎日です。

冬になれば、大根、白菜、ねぎ。

ああ、いまは冬なんだ、とごはんを食べながら感じていた。

季節感なんて、大きさに言わなくても、舌が、体が感じる。

きれいなものを見ること。

交差点で空の青さを感じること。

炊き立てのごはんを食べること。

お茶をゆっくり飲むこと。

たしかにどれも、とりたてていうことではない。

でも、今はそのかけがえのなさを痛いほど感じている。